岡山大学短期留学プログラムEPOKの受入における「個別研究」科目の取組

Individual Research Project as a course in the EPOK Course Curriculum

大林　純子
Junko OBAYASHI

岡山大学全学教育・学生支援機構
教育研究紀要
第５号　2020 年 12 月

岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第5号（2020）240 － 248

岡山大学短期留学プログラムEPOKの受入における「個別研究」科目の取組

大林純子

Individual Research Project in the EPOK Course Curriculum

Junko OBAYASHI

要　旨

短期留学プログラムEPOKの受入においては、多様化しうる受入留学生の目的やニーズに対応する学習（履修）コースの拡充が必要である。とりわけ、過半数が英語圏からの交換留学生であるEPOKでは、英語を使用言語として運営しており、履修コースにおいても英語による授業の拡充は第一の課題である。本稿では、交換留学生にとって必要十分な学習プログラムを模索するうえで、個別研究（Research Project）科目を活かす工夫に注目する。特に、EPOK修了カリキュラムにおいて必修科目と位置づけ、大半のEPOK生が履修する個別研究科目(EPOK Research Project)の開講、留学生の取組みを概観する。なかでもリサーチのトピックに表れる留学生の関心分野は履修コースの拡充という課題に示唆を投じてくれる。5年間のEPOK Research Projectの成果と課題を振り返り、留学生のニーズに合う個別研究科目の改善を図りたい。

キーワード：交換留学受入プログラム、留学生教育、個別研究、留学生の関心テーマ

1. はじめに

岡山大学短期留学プログラム（Exchange Program at Okayama 略称EPOK）は、平成10（1998）年10月に発足以来、令和元（2019）年[1]までに延べ502名の留学生を受け入れた。初年度（1998）2名から始まった受入は、2019年度は年間45名を受け入れるプログラムに成長した。加速化するグローバリゼーションを背景に、2014年に政策としての「留学生30万人計画」が打ち出され、高等教育の国際化の一角としての留学交流の促進に拍車がかかり、スーパーグローバル大学創成支援事業（通称SGU）に採択された本学でも協定校の開拓や受入学生の学習・生活環境を拡充し、受入プログラムの強化を図ってきた。近年ではヨーロッパやアジアに新規交流協定が増進する一方で、米国の大学との学生交流協定が終了するケースも発生している。いずれも、多様化する受入学生に対して充足した受入プログラムとなるためには何が必要か、が問われた結果とも言える。

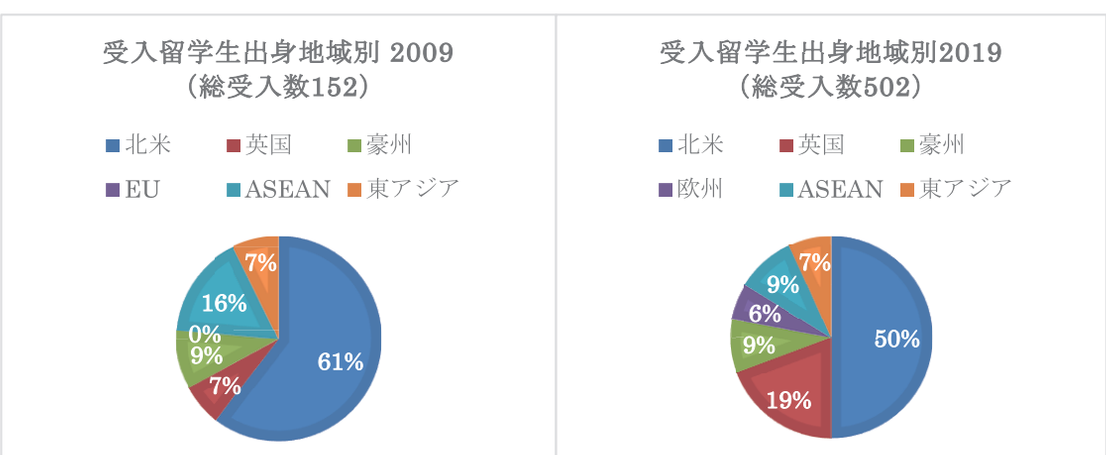
日本語と日本文化の学習を中心に据えた初期の留学生プログラムが、グローバル世界の変化と共に増進する受入留学生の関心やニーズにあったプログラムに進化するためには、どのように履修科目やカリキュラムを改良するべきか。交換留学生が英語を使用することを前提とした交換留学プログラムにおける学際的かつ専門的科目の開講とカリキュラムの体系化はEPOKプ

ログラム開始以来の一貫した課題である。例えば、EPOKプログラムにおける学習カリキュラム（履修科目）の改善の初期の取組みに関し、中村（2002, 2003）により、英語による授業の拡充、日本人学生との共修を実現するための教養教育科目化が紹介されている。また、近年の英語による授業科目の拡大、カリキュラムの編成の試みについては、「EPOKの受入状況とEPOKカリキュラムの取組」（大林、2017）として報告をした。

本稿では、EPOK受入留学生を対象とする授業科目編成や学習プログラムの改善を目標に、カリキュラム再編後に設置した「個別研究」科目（「EPOK Research Project」）の5年間の取組みに焦点をあて、留学生の履修動向や関心テーマ、研究課題について観察し、個別研究科目の意義を考察したい。

2. EPOK留学生の受入状況

平成10(1998)年度から令和元(2019)年までEPOKの受入学生総数は502名に達した。平成24（2012）年を境に明らかに増進し、2020年度EPOK協定校は16か国、45校にわたっている。実際に受け入れる留学生の出身国別内訳に着目すると、2019年度までの総計において、英語圏（米国、カナダ、豪州、英国）からの受入数は78%、非英語圏（欧州、ASEAN、東アジア）からは22%である。この内訳は2009年度のそれと大きく変化していないが、学生の出身地域を観察すると、過去10年間にヨーロッパ（非英語圏）からの受入が増進し、地域別の内訳バランスがより多様化する傾向にあることがわかる。[図1] また、ヨーロッパの協定校（ハノーバー、フォスカリ）からは特に近年、修士課程の学生を受け入れるケースも散見されている。



［図１．受入学生の地域別内訳、2009年および2019年］

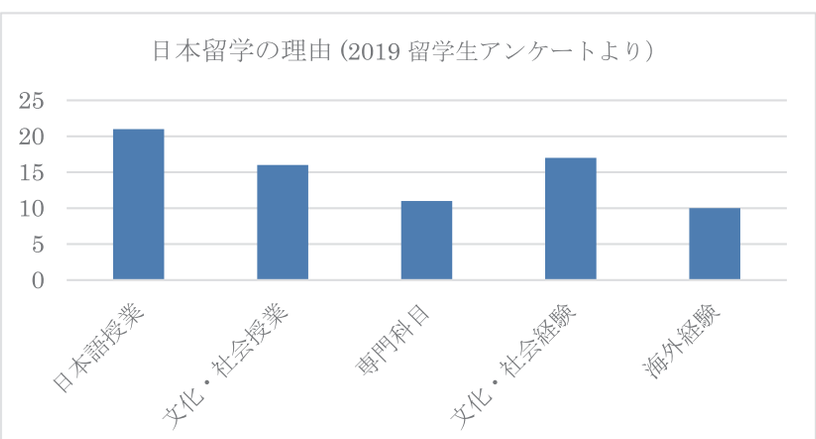
3. EPOK受入プログラムの開講科目

英語を使用言語とする授業によって構成するEPOKのコース科目リストはどのように拡充してきただろうか。EPOK受入の先任者である中村（2002、2003）の報告では、2001年、2002年における「EPOK総合科目」（英語による授業）は、理系を中心に8学部で年間10科目[2]開講されていた。さらに、各年度の延べEPOK総合科目履修生数は各々、50名（2001年）、52名（2002年）

と記録されている。これは、各年度の延べ全受入数が17名（2001年）20名（2002年）であることを考えると高い履修率（各科目平均3～6名）と言えるだろう。無論、英語による開講科目がこれらの科目に限定されていたため履修が集中したと考えられるものの、一方では「EPOK学生の専門が多様である」（中村,2002）ことが指摘されており、かつそれが理系を中心に展開していたことは興味深い。なぜなら、近年とくに2014年以降は理系学生の参加は特定協定校[3]に限定される傾向にあり、全体としてはごく僅かな受入数となっているからだ。

時を経て、2019年度のEPOKコースカタログにはEPOK推奨科目[4]として120科目を掲載している。これは、2016年度より4学期制になったことから科目数が端的に倍加していることに加えて、グローバル・ディスカバリー・プログラム（GDP）の専門科目及び教養教育科目が大幅に加えられたことによるものである。とりわけ、GDPの教養教育および専門科目の一部が受講可能となることにより、理系を含む[5]学際的なコースリストを構成することができた。しかし、外見上の科目数はたしかに増進しているが、交換留学生にとっては日本での交換留学プログラムにおいて履修したい、あるいは履修すべき科目を探すうえでは必ずしも潤沢な科目構成とは言えない。したがって、実際にEPOK留学生が履修する科目は限定的になる。前述の通り受入留学生の専門分野が以前と比べて必ずしも多様化したわけではなく、学際的科目リストが有効活用されないことも想定できるのである。

EPOK留学生へのアンケート[6]から、留学生のニーズに合った授業科目を提供することは交換留学の受入プログラムにとって極めて重要であることが再認識される。就学目的において日本語授業が第一であることは不変であるが、日本文化や社会に係る科目や、専門科目の履修も高い要請があるからだ。学生からは、現行プログラムに不足している（専門）科目分野としてビジネス、政治、芸術が挙げられている。



［図2. EPOK生の日本留学の理由、2019年データより］

留学生の関心やニーズに対する学習機会を創出する工夫が授業内外で模索されている。その一つとして「個別研究」科目は、開講科目の中で必ずしも充足しない関心分野や課題に対する学習機会を設ける意味でも有効な科目と言える。また、修士課程の学生や専門分野の研究や演

習活動を望む学生の学習機会として有用な科目である。個別研究科目は「Independent Study」として初期のEPOKから開講されていた。Independent Studyは、EPOK受入学生が履修することのできる専門科目数が限定されるなかでは、これを補う役割を果たしてきたと言える。例えば、2014年から2016年にかけては、医学部指導教員の下で研究室や実験活動に参加、リサーチ指導を受けるIndependent Studyを開講した。文系の研究課題についてはEPOK受入教員が指導教員としてIndependent Studyを開講[7]してきた。Independent Studyという専門分野における個別研究科目を増進するには、多分野における指導教員のマッチングは難題である。2016年度にEPOK留学生の受入が部局からグローバルパートナーズ（現グローバル人材育成院）に移行したことも、こうした個別指導や受入の仕組みを難しくしたと感じる。

一方、2014年度からEPOK生の修了レポートとしてスタートした「EPOKエッセイ」が、後に「EPOK Research Project」として単位化、個人の研究科目として設置されたことから、後述するように2018年のカリキュラム改編においてIndependent Studyの開講を終了し、個別研究は「EPOK Research Project」に一本化された。

4. EPOK Research Project の開講と取組

4-1. カリキュラム編成と必修科目化

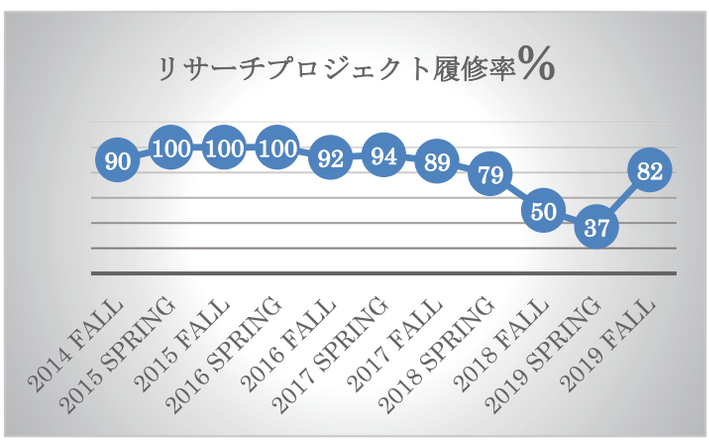
2014 年度に受入プログラムでは、それまで EPOK 留学生が修了時に提出していた「留学体験レポート」の代わりに、自由研究に基づくアカデミック・レポートとして「EPOK 修了エッセイ」を作成し、発表会を施行することとした。年度にまたがって留学中の学生もあったことから、この変更の移行期として 2014 年度前期には「私の理解した日本」と題して留学体験記に準じた修了レポートを作成し、これを EPOK 文集として纏めた。EPOK 受入プログラム修了の発表会として、レポートのプレゼンテーションを行った。後期からは、春期（前期）に新規来学した EPOK 生を対象に、日本に関わる自由研究テーマの選択、エッセイ作成、学期末の発表を指導し、EPOK プログラムの修了課題と位置づけた。

EPOK 修了エッセイ文集は、以来 2019 年度秋期まで継続して編集、公開、保存している。2014 年初年度および 2015 年度の修了エッセイでは、EPOK 履修科目から派生した日本の伝統文化、現代文化、言語習得等をテーマとする例が散見できる。また、逆に履修科目の中で網羅されないテーマについて、個々の関心（音楽、沖縄の政治的課題、神社仏閣、食文化など）を自由研究したものも目立った。中には、作成中の卒業論文にこの自由研究を活かす目的でリサーチを行う学生もあった。

2016年度には、EPOK修了カリキュラム（修了証）の設定[8]とともに、課外プログラムとして１年半期間施行していた「EPOK修了エッセイ」を単位化した。EPOK修了カリキュラムは日本研究をサ

ブテーマとすることとし、個別の日本探求のテーマに沿った自由研究科目（Research Project）を必修科目と位置づけて開講した。すなわち、「EPOK Research Project 1」および「EPOK Research Project 2」の2科目、計2単位である。「EPOK Research Project 1」は、研究プロジェクトのテーマ設定からリサーチ・メソッド、文献調査、アウトライン作成まで、「EPOK Research Project 2」は、エッセイの執筆、概要(翻訳)、文集編集、プレゼンテーションの指導を行った。エッセイは本学ＨＰ上にも掲載し、EPOK生の学習成果発表の場としてのプレゼンテーション（フォーラム）は全学的広報も試みた。EPOK生にとっては研究発表を通じて全学にプレゼンスを示す場、日本人学生には留学生による日本をテーマとした研究や発表から知的刺激を受け学ぶ場を創出することを意図したものである。

これにより、必修科目として指導をすることが可能になり、成果としてのリサーチ・エッセイの質の向上を確認することができた。また、修了カリキュラムの必修科目として大半の学生が履修し、単位交換に活かすことのできる科目となった。一方では、必修だから履修するものの自由研究そのものに本来のモチベーションを持たない学生もあった。それは、学生との会話や成果としてのリサーチ・エッセイを評価するなかで確認された。



［図3. リサーチ・プロジェクト（EPOK Research Project）履修率］

自由研究科目を学生が取り組みやすく、取り組みがいのある科目とするにはどのように指導していけばよいか。学生のモチベーションを保ち、リサーチや成果物としてのエッセイの質を向上させるには何が必要か。これらは指導教員として取り組み中の課題である。それに取り組む体制として、個別研究の受講生（EPOK受入数）が30名を超え、更に50名近くになるについて、複数の教員によって指導を分担することとした。結果、2018年度以降はEPOK受入生に担任教員を配置[9]し、個別の研究指導がより行き届く体制ができた。

履修の仕組みとしては、EPOK修了カリキュラム（修了証）の設置と自由研究科目の必修化が、学生にとって有用な内容になるように工夫していくことが必要である。

4-2. EPOK修了カリキュラム（修了証）とEPOK Research Project

交換留学プログラムにおける修了カリキュラムの有用性については議論のあるところであ

る。EPOKでは、科目の拡充に合わせて、本プログラムを語学（日本語）研修に留まらず、日本やグローバル社会について学ぶ学際的プログラムと再定義し、語学科目に偏らない積極的な科目履修の動機づけの一案として修了証（Certificate）を授与するEPOK修了カリキュラムを施行している。このカリキュラム設定は、結果としても学生の科目履修の動機づけや必修科目としての個別研究への学生の取組み方に大いに関係することとなっている。

2年間の施行を経て、2018年度にEPOKカリキュラムを見直し、その要件を改訂した[10]。すなわち、EPOKは語学研修プログラムではないことを明示し、日本語コースに偏重しない学際的履修を奨励するものである。改訂後のカリキュラムでは、必修科目であるResearch Projectを個々の学習を代表する成果として核となる科目と位置付け、留学期間が1年間の学生は留学期間[11]を通じてリサーチに取り組むこととした。また、このカリキュラム改正にともない、Independent Studyとの並存を解消し、個別研究科目としてEPOK Research Projectに一本化された。

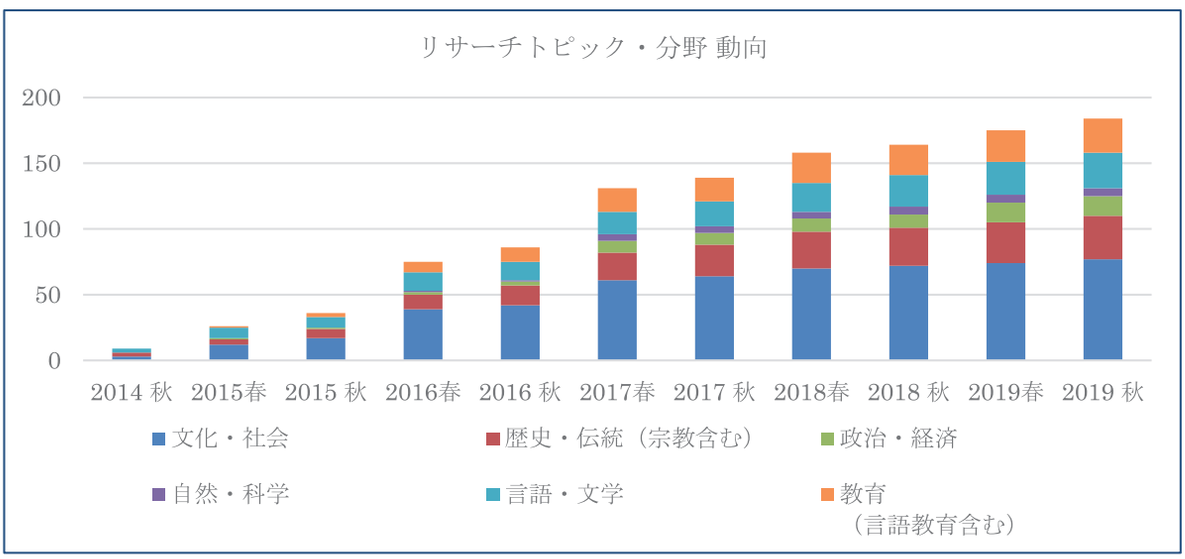
［図3］をみると、EPOK修了カリキュラムの設置と改訂、とくに2018年度の改訂はEPOK Research Projectの履修率の低下に影響しているように読み取れる。これは、修了カリキュラムを遂行するためにEPOK Research Project（個別研究）を履修する学生が多いことを示している。修了カリキュラムを遂行しないが、個別研究科目を履修することは可能であるが、そうした履修者は少ない。したがって、2018年度の改訂カリキュラムにより、ジャンル別EPOK科目および「日本事情」の必修化が学生の負担となるケースが発生し、結果としてカリキュラム遂行を断念、EPOK Research Projectも履修しない学生が多かった。

5. リサーチのトピックにみる留学生の関心分野

学生にとってのEPOK Research Project の意義を見出すとすれば、単位交換や卒業論文に活かすといった最もプラクティカルな目的の他、日本に留学した経験を通じて自分の個別の関心テーマを掘り下げてアカデミックなリサーチ・エッセイという成果を発表し単位取得するということではないだろうか。そこで、学生がリサーチのテーマとして選択する分野から、学生の志向を観察してみた。2014年秋期から2019年春期までのEPOK Research Projectの全リサーチ・プロジェクト184点のトピックを、「文化・社会」、「歴史・伝統（宗教含む）」、「政治・経済」、「自然・科学」、「言語・文学」、「教育」に分類したものが［図4.］である。

なお、分類のカテゴリーは大枠を採用しており、「文化と伝統」、「言語と（言語）教育」の境界の曖昧さ、また政治的テーマと経済、ビジネスを同じカテゴリーにする根拠など、分類としての限界点があることを断っておく。それらの線引きそのものがトピック分野の傾向をある程度反映した結果である。

リサーチトピック分野	2014秋	2015春	2015秋	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋	累計
文化・社会	3	12	17	39	42	61	64	70	72	74	77	77
歴史・伝統（宗教含む）	3	4	7	11	15	21	24	28	29	31	33	33
政治・経済	0	1	1	2	3	9	9	10	10	15	15	15
自然・科学	0	0	0	1	1	5	5	5	6	6	6	6
言語・文学	3	8	8	14	14	17	19	22	24	25	27	27
教育（言語教育含む）	0	1	3	8	11	18	18	23	23	24	26	26
（累計）	9	26	36	75	86	131	139	158	164	175	184	184



［図4. EPOK Research Project リサーチ・トピック 分野別動向］

全体として、「文化・社会」に係るテーマは最も多く、全期間を通じて大きな割合を保っている。その個別トピックは、例えば、日常的な日本の習慣や食文化からポップカルチャー、日本人の幸福観や労働観念、外国人観など、自由に幅広く選択されている。これらは、教養教育科目の中で扱われているテーマにも通じている。これに続いて、「伝統文化・歴史」、「言語・文学」および「教育」が一定の高い関心分野であることが示されている。「伝統・歴史」には宗教（神社、寺）に係るトピックを含めている通り、日本人の宗教観と慣習に対する一定の関心がみられる。「言語」では日本語学習や、日本語の使用からみる社会的な特徴（敬語、ジェンダー、上下関係）に触れている。「教育」は多くが日本の大学（岡山大学）における英語教育をテーマとしており、EPOK生の高い関心分野である。英語教育を専攻する学生や留学中に英語を教える経験をした学生、また卒業後の進路として英語教員をめざしている場合も多い。また、大学の部・クラブ活動に関するトピックも、少なからず学生を刺激するテーマであることがわかる。分類数としては少数の「政治・経済」は、2017年度以降の留学生の増加と共に取組の目立つ分野である。また、この分野でのリサーチ・エッセイには、各学生の専攻分野での研究力のある質の高い小論が多く提出されている。それらは、ケント大学（英国）、ハノーバー大学（ドイツ）、カフォスカリ大学（イタリア）の大学生または院生によって多く選択されて

いるテーマである。一方、「自然・科学」を選択する学生は少ない。工学、農学、生物学を専門とする学生が少数あったが、EPOK Research Projectの枠組みでIndependent Studyのような専門研究に携わることは難しい。それらのリサーチは、それらの専門分野に係る日本人の取組や考え方に着目して、社会学的に比較研究するテーマが多かった。そのリサーチは、専門分野の研究そのものではないが、社会学的な比較研究として各々の学びに寄与するものと考えられた。

EPOK Research Project にみるEPOK生の関心テーマと取組みの動向を、ニーズに合ったEPOKの学習カリキュラム、科目の開拓、個別研究科目の改善に反映させていくことは、次の課題である。

5. おわりに

EPOKにおけるカリキュラム編成の改善や課題は、最も実質的には英語による授業の開講が制限されることに起因してきた。これに対して、EPOK Research Projectなど個別研究科目は補完的役割を果たしている。2020年現在、EPOKの推奨科目リスト（英語による授業で交換留学生が履修可能な科目）に分野を横断する120科目が掲載されていることは、岡山大学短期留学プログラム(EPOK)としての形は整えられていると言いたい。しかし、本学での交換留学プログラムで語学研修に留まらない、専門分野も含めた豊かな就学をより可能とし、多様な留学生のニーズにも対応することのできる有効かつ魅力のあるEPOK学習カリキュラムは、個別研究科目の取り組みをはじめ、今後も模索しなくてはならない。

本稿をまとめる過程で、交換留学プログラムを通じて求めているグローバル人材育成とはどのようなものなのだろうか、また、留学生が求める学びや成果は何だろうか、と改めて考えた。振り返れば、高等教育における留学促進は1980年代の「国際化」への指向の中で展開してきたし、自分自身もそのような時代に留学をしてきた経験がある。今日、グローバル人材育成として留学促進に取り組むなかで、あの「国際化」と「グローバル人材育成」は本質的には変わっていないように思われる。日本人学生と海外学生のモビリティと交流を採りこむことによる異文化理解と経験の促進。一方、（留）学生の立場からみるとどうだろうか。インターネット環境が浸透進化し、国境を越えた異文化との少なくともバーチャルな交流を所与のものとして育ってきた現代・次世代の留学生のニーズや取組み方は、当然変化しているはずだ。しかし、留学生の関心テーマや本質的な目的を探るとき、この留学に求める学びや成果には変わりないものも多いと感じた。抽象的な結論になるが、留学における多様化するニーズと普遍的なテーマを認識し、これに対応するEPOK Research Projectの科目開発、EPOK受入カリキュラムの進化を、次年度以降も目指したい。

注

[1] 2020年度は、全世界的新型コロナウィルス感染症の拡大のため、EPOKによる学生交換を休止した。

[2] （全て和名による）前期：「医歯学の最前線」，「異文化間コミュニケーション」，「日本の環

境」，「生物学の最前線」，「日本経済と政治の諸問題」，後期：「化学の最前線」，「日本の社会と文化」，「農学の最前線」，「日本の工業と技術」，「薬学の最前線」。

[3] 2014年から2015年のビショップス大学のバイオメディカル、2016年以降のサリー大学のバイオメディカル学生。特にサリー大学との学生交流については、バイオメディカル学部限定の交流であることから、2018年度以降EPOK受入から医学部受入のプログラムと変更された。

[4] 推奨科目は、英語で受講することが可能な科目である。グローバル人材育成院、言語教育、グローバル・ディスカバリー、その他の開講する教養教育科目および専門科目から選定し、交換留学生に関する基本的な受講許可を得た科目によって構成する。

[5] 従来の理系のEPOK総合科目の多くは、GDPの科目として開講されるようになった。

[6] アンケートは、プログラムを修了した留学生が質問項目につき選択肢から3項目を選んだ。

[7] 2013年から2017年度。受講生は以下の通り。2013年度（CSUフラトン、ハノーバー）、2015年度（エジンバラ、ダラスバプティスト）、2016年度（アリゾナ、CSUフラトン）、2017年度（アリゾナ）。主たる研究課題は、日本語、日本古典文学、日本文化、英語教育。

[8] 2016（平成28)年度にEPOK修了要件を設定し、これにもとづいて「EPOK study japan」修了証を付与するカリキュラムを整えた。EPOK修了要件は、①各半期（1および2学期、3および4学期）に14単位以上履修すること、②EPOK Research Project 1および2（計2単位）を履修すること、③最低1科目の日本語科目と最低1単位のEPOK（推奨）科目を履修すること。

[9] 指導教員の選定は、以前のIndependent Studyの場合と同様に課題が残る。現行では、グローバル人材育成院所属教員の専門分野に対する留学生の関心分野やトピックをマッチングして担任を配置する。指導可能な専門分野には限界があるため、必ずしも理想的なマッチングにならない場合もあり得る。担任は、必要に応じ専門分野でのアドバイスを得ることのできる部局教員への紹介を行うこととしている。

[10]2018年度改訂の修了要件は、①各半期（1および2学期、3および4学期）に15単位以上履修する、②各学期中、EPOK Research Project 2単位を履修する、③「日本文化と社会」、「異文化コミュニケーション」、「自然科学」の各ジャンルからEPOK科目を1科目ずつ、計3科目以上履修する、④日本語科目を４単位以上履修すること。

[11] 科目開講と付与単位は2科目2単位のまま。この点について2019年度および2021年度に改訂検討中。

参考文献

中村和泉(2002)「岡山大学短期留学特別プログラムEPOK－3年間を経過した受け入れプログラムの現状と課題」岡山大学留学生センター紀要第9号

中村和泉(2003)「岡山大学短期留学特別プログラムEPOK－「英語による授業」改善への取組と課題」岡山大学留学生センター紀要第10号　pp.61-77

大林純子（2017）「岡山大学交換留学プログラムEPOKの受入状況とEPOKカリキュラムの取組」